

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>2005年の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、長満たき、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://iwasakijunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakijunichi.net/waka/				
詠進年月日	題	2005年の歌会・歌合	通釈	語釈	他歌人欄	
主催: 岩崎純一	歌数:12首 歌人数:3名 自歌数:4首	『春夏秋冬夜詠歌合』(しゆんかしようやえいうたあはせ)			評	派生歌など
2005/7/17 出題 2005/8/7 判	春夏秋冬の夜を詠むこととした。 出題者:岩崎純一 衆議判					
2005/7/20	春夜	昼間よりおぼろの影ぞ思ほゆる暗さの先に立つ霞かな	暗い夜になるよりも前に霞が立っているのを見ると、昼間からすでに、朧月の姿は思い起こされる。			
2005/7/20	夏夜	夕間に沈む心地のあはひかな 蛍の光窓のともし火	夕間のように沈んでいる我が心地のすき間を縫うものだ。蛍の光と、窓のともし火は。	◇参照 「夕殿螢飛思悄然 孤灯挑盡未成眠」(白居易『長恨歌』)	◆長恨歌の名句を借りた一首。稲垣千穎作詞の「蛍の光」の冒頭節「蛍の光窓の雪」をも思わせて温かい。(長満たき)	
2005/7/20	秋夜	など秋の夜風は冬を残しつつあはれ極めて身にぞ染むらむ	どうしてこうも秋の夜風は、一年のうちのもう一つの季節たる冬を残しながら、一年分の情趣の頂点を極めて、人の身に染みるのであろうか。			
2005/7/20	冬夜	風寒き闇てふ冬や弱るらむ年の限りの折にあらずは	風が冷たいこの冬の夜という闇のつらさも、弱って見えるであろう。もし冬が一年の最後のつらい季節でなかったなら。			
主催: 岩崎純一	歌数:9首 歌人数:3名 自歌数:3首	『川崎十五夜月歌合』(かはさきじふごやつきうたあはせ)			評	派生歌など
2005/9/18 即詠	神奈川県川崎市にて十五夜の月を眺めた感懐を詠むこととした。 出題者:岩崎純一 衆議判					

2005/9/18	十五夜月	こころざす恋なほ秋の中空に 月影ばかり満つけしきかな	私が叶えると心に決めた恋は、 やはり、どっちつかずの秋の天 空に、心は満ちることなく、中秋 の名月ばかりが満ちている景色 でございます。	◇掛詞「中空に(うわのそら で)×(天空に)」 ◇参照「名に高きこよひや 秋の中空に光満ちたる月のさ やけさ」(『新拾遺』)		
2005/9/18	十五夜月	大空は秋の半ばになり果てて 風も折々おほふ叢雲(むらく も)	大空は秋の十五夜の季節になり 果てて、時々風に吹き寄せられ た群雲が月を覆う。	◇参照「明けばまた秋のな かばも過ぎぬべしかたぶく月 の惜しきのみかは」(定家『新 勅撰』)		
2005/9/18	十五夜月	かごとには聞こえぬ空のくまな さよ秋のもなかの袖宿る影	「私の袖に月が宿っているのは、 涙のせいではなく、空の隈なさ のせいです」と言っても、言い訳 には聞こえない、今日の中秋で す。	◇参照「水の面に照る月な みをかぞふればこよひぞ秋の もなかなりける」(『拾遺』)		